
無限の欲望は愚者を喰らう

火水木金土符「賢者の舞」

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限の欲望は愚者を喰らう

【Nコード】

N0407Z

【作者名】

火水木金土符「賢者の舞」

【あらすじ】

私は無限の欲望、ジェイル・スカリエッティ。まあ…中身は普通の日本人なのだがね。これはそんな私と転生者による戦いの物語だ。さあ、転生者諸君！私の欲望が満ちるまで存分に遊ぼうかつ！
おーいウーノー！あらすじってこんなでいいよねー？

欲望の産声

ゴポッ

粘度の高い緑色の液体に満たされた水槽の中で目を覚ました俺が一番初めに見たのは、ガラス越しに俺を見て騒ぐ数人の白衣を着た科学者らしき人間だった。

目の前の科学者達は「ついにアルハザードの技術を我々の手で！」や「科学による人間の創造を成しえた！」等と意味のわからない事言っている。

…意味のわからない？

いや、わかる…『俺』にはわからないが、『私』にはわかる。

アルハザードとは進みすぎた科学によって滅びた文明だ。

そして彼らは、アルハザードの技術によって『私』を生み出した。しかしわからない事もある。

『俺』は何故『私』として生まれてきた？

『私』の中に何故『俺』がいる？

違和感を感じた瞬間に、脳が焼けるように熱く感じた。

意識…が途絶え…る。

俺が気絶する直前、科学者の一人が俺に声をかけたきた。

「0歳の誕生日おめでとう。アンリミテッドデザイン無限の欲望、ジェイル・スカリエツ
ティ。」

動作テスト

ここは何処？

目を覚ましたら、見知らぬ部屋のベッドで寝ていた。着た覚えのない病院で入院している人が着る、患者衣を着せられている。俺が寝ている間に何があったんだ？

「おお、目が覚めたか！体に異常は無いかね？」

「っ！？ええ、ありません。」

突然、部屋に取り付けられたスピーカーから老人の声が聞こえた。かなり驚いたけど、すぐに気を取り直して冷静に振舞う。「私」ならそういう反応をするだろうから。

「それなら良い。現代の機械で精密検査を行い、健康だと判断されたが、ロストテクノロジーで創られた君の身体はその程度では安心できないからね。うむうむ、これで懸念事項は1つ消えたな。」

老人が話している間、目がさえた俺は混乱と沈静を繰り返していた。答えを知らない筈の疑問がいくつも浮かび混乱するのに、すぐに『私の知識によって疑問が解決する。わけが分からない。』

『俺』の知らない知識を何故持っている？ 『私』が創られた時に知識を脳に入れられた。

『私』とは誰なのか？ アルハザードの技術によって生み出された人間。

『私』は何故創られたのか？ 扱う事がほぼ不可能なロストテクノロジーを研究し、扱わせる為。

『俺』は何故『私』として生まれた？

『私』の中に何故『俺』がいる？

「それでは、これから簡単なテストをしてもらう。今から職員が向かうから待っていてくれ。」

「はい。わかりました。」

老人が俺に話しかけると、すぐに思考を切り替えて返事をする。

頭の回転が早くなったな、と思つたら『私』がそういう風に創られたからと答えがだされる。

それを皮切りに、また思考の海に埋没しそうになった時、プシューと音を立てながらドアがスライドして開いた。

「はあ、はあ、本当だ！主任の言った通り、ディザイアプロジェクトが成功したんだ！」

息を切らしながら部屋に入ってきたのは20代後半の白衣を着た男性だ。激しい運動に慣れていなさそうな細い体で全力疾走したのだろう。汗をかき、顔を真っ赤にしている。

だが、疲労で辛そうにしていた表情は、俺の姿を見た途端満面の笑みに変わった。

「ふふふ、これから君に不備がないかテストさせてもらつよ。まあ、我々の研究成果に不備があるとは思えないけどね！」

その後、無駄にテンションの高い男性から簡単な質問、軽い運動をさせられた。

それらが終わった後、用途のわからない30cmほどの棒状の物体を手渡される。片側の先端に宝石のような丸い物で装飾がされているが、それ以外に目立った箇所はない。

「これは何でしょうか？」

「そういえば、君には我々では再現できないロストテクノロジーの知識と、言語やある程度の常識以外入れられていなかったね。それはデバイス、魔法の発動を補助するものさ。簡易の物だけだね」

魔法？ありえなくはないか。『私』の中にいる『俺』も魔法じみた事だしな。

「魔法はデバイスを通して私が発動させるから、君はそれを持っているだけでいい。」

白衣の男性が懷から出したノートパソコンのような物を操作し始める。

10秒ほど経つと、俺の周りに3個の光球が出現した。

これが、魔法か。

「よし！リンカーコアも問題なく生成されてる。これで最低限の動作は保障されたな。今日のテストはこれで終わりだよ。明日以降もしばらくテストが続くから、十分に休憩をとってね。」

そう言うと、白衣の男性は部屋を出て行った。

再び一人になったので、今度こそ思考の海に沈む。わからない事だらけの現状を確認するために。

それから数日後、俺が過ごしていた研究所らしき施設から出る事になった。

俺の機能は問題ないと判断されたので、お披露目の為にお偉いさんと面会させるそうだ。

「ほう、これがあのアルハザードの技術によって創られた人間か。」

「これがロストテクノロジーやロストギアの研究に成功すれば、時空管理局の地位は更に高まるな。」

「ふん、高まって貰わねば困る。これを創る為にどれだけ経費がかかったかわかっておろう。」

俺の目の前で最高評議会という、時空管理局のトップ3が話し合っている。

これが時空管理局のトップ。身体を棄て脳髄だけになっても、生き続ける人間か。

この生への欲望を見ていると、彼らの方が無限の欲望の名に相応しいと思えてくるな。
アンリミテッドデザイン

「それではジェイル・スカリエッティには研究設備を与え、自由にさせる。ただし、我々が用済みと感じれば即刻廃棄する。これでよろしいかな？」

「異議なし。」

「問題ない。話はこれで終わりだ。ジェイル・スカリエツィ退室しろ。」

「はい。失礼します。」

ククク、これや廃棄とは、俺を人間として見ていなかったな。まあいい。

この世界が『魔法少女リリカルなのは』だという事はとくにわかっている。

原作介入に必要ななる、技術という名の武器を活かせる研究設備を用意してくれるんだ。あの程度で奴らを恨みはしないさ。

ああ！それにしても楽しみだ！物語の主人公たちが『俺』の欲望を満たしてくれますように。

動作テスト（後書き）

最高評議会の口調は適当です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0407z/>

無限の欲望は愚者を喰らう

2011年12月1日22時57分発行